

「Team Sendai（チームセンダイ）」による被災自治体職員の 災害対応の継承に関する研究 ～その2

Sharing Experiences of Sendai City Official's Disaster Response Activities on the 2011 Great East Japan Earthquake Disaster with Other Local Government Officials: Team Sendai's Approach

柳谷 理紗¹, ○西坂 光², 鈴木 由美³, 佐藤 翔輔⁴, 田中 聡⁵, 重川 希志依⁵
Risa YANAGIYA¹, Hikaru NISHIZAKA², Yumi SUZUKI³, Shosuke SATO⁴,
Satoshi TANAKA⁵, and Kishie SHIGEKAWA⁵

¹ 仙台市 まちづくり政策局 防災環境都市・震災復興室 / Team Sendai

City Planning Policy Bureau Disaster-Resilient and Environmentally-Friendly City Promotion Office, Sendai City Office / Team Sendai

² 仙台市南蒲生浄化センター / Team Sendai

Minami-Gamo Wastewater Treatment Plant, Sendai City Office / Team Sendai

³ 仙台市博物館 / Team Sendai

Sendai City Museum / Team Sendai

⁴ 東北大学 災害科学国際研究所

International Research Institute of Disaster Science, Tohoku University

⁵ 常葉大学大学院 環境防災研究科

Graduate School of Environment and Disaster Research, Tokoha University

Team Sendai—the voluntary group of Sendai city officials, has established to skill up the individual capability for the Officials. After the 2011 Great East Japan Earthquake Disaster, it launched a project for collecting and disseminating lessons learned from the disaster response activities of Sendai city officials. The project was started as voluntary basis, and in 2018, it was promoted to an official project of the Sendai City government. It is also a joint research project with Sendai City government, Tohoku Univ., and Tokoha Univ. This paper introduces not only the research activities but also disseminating activities to the other city officials who may have same experience in the future events and discusses the outcomes and issues of the project.

Keywords : disaster ethnography, the 2011 Great East Japan Earthquake, disaster response, lessons learned, narrative

1. はじめに

仙台市職員の自主勉強会 Team Sendai（チームセンダイ）は、オフサイト活動のなかで 2012 年 1 月より東日本大震災における職員個人の体験談の聴き取りを行ってきた。その 1¹⁾ では、Team Sendai 主体で行った震災体験談の活用による参加者意識の変化と活用手法の可能性について考察した。本稿ではその 2 として、オフサイト活動で開発した伝承手法の実践例を報告した上で、その成果と課題について考察する。なお本稿で取り上げる実践例は、仙台市職員および他自治体職員への研修、一般向けの伝承企画における事例である。

2. 取り組みの経過

これまでの取り組みの経過については（表 1）のとおり。現在、大きく分けて①エスノグラフィー調査等による仙台市職員への体験談の聴き取りと記録、②聴き取った記録の活用の 2 つの活動を展開している。

①については、2018 年 4 月より仙台市事業（担当課：まちづくり政策局防災環境都市・震災復興室）へ発展し、常葉大学・東北大学・Team Sendai の 4 者共同で実施している。

表 1 これまでの取り組みの経緯

年月	内容
2010. 9	Team Sendai 発足
2011. 3	東日本大震災発災
2011. 12	Team Sendai 内に仙台市職員からみた震災記録チーム発足 ～（活動内容：ヒアリング、冊子化、語り部の会、朗読・動画・クロスロード等による体験談の活用など）
2017. 6	常葉大学・東北大学・Team Sendai の 3 者共同による仙台市職員へのエスノグラフィー調査開始（協力：仙台市）
2018. 4	常葉大学・東北大学・Team Sendai・仙台市の 4 者共同による仙台市職員へのエスノグラフィー調査開始

②については、これまで勤務時間外を中心に伝承企画を実施してきた。しかしながら市事業となったことにより、2018 年 11 月に勤務時間内の震災体験伝承講座が実現した。その他にも区役所の防災担当課から依頼を受け、体験談の朗読を市職員の業務として実施するなど、勤務時間内での活用の機会が増加した。また報道や雑誌掲載による活動の周知が進んだことにより、他都市等からの依頼を受け出前講座や企画協力を行っている。

3. 仙台市職員に対する災害エスノグラフィー調査

2017 年 6 月～2019 年 1 月までのエスノグラフィー調査項目については（表 2）のとおり。

表2 2017～2018年度のエスノグラフィー調査内容

	年月	業務	人数
1	2017.6.20	若林区保健福祉センター	1名
2	2017.7.21	市災害対策本部	1名
3	2017.8.10	被災者生活再建支援	1名
4	2017.8.10	被災者生活再建支援	1名
5	2017.8.14	仮設住宅管理	1名
6	2017.8.14	被災者生活再建支援	1名
7	2017.10.27	震災廃棄物処理	1名
8	2017.12.01	ガス局	5名
9	2018.7.20	若林区長	1名
10	2018.9.6	環境局長(震災廃棄物処理)	1名
11	2018.9.18	宮城野区長	1名
12	2018.10.5	若林区避難所担当	2名
13	2018.10.30	遺体安置・埋火葬	4名
14	2018.11.28	罹災証明	1名
15	2018.12.14	青葉区避難所担当	6名
16	2019.1.11	仙台市立病院	3名
			31名

4. エスノグラフィー調査の成果活用と結果

Team Sendai ではオフサイトでのヒアリングやエスノグラフィー調査の成果を元に、市職員の体験や教訓を朗読(表3)・映像・災害シミュレーションゲーム「クロスロード」等に活用するなど、伝承のための手法開発に取り組んでいる。ここでは仙台市職員および他自治体職員への研修、一般向けの伝承企画(企画協力含む)で実施した7つの事例を紹介し、それぞれの参加者の感想をまとめた。

表3 朗読原稿例

朗読タイトル	
避難所勤務でよかった。生きている人の力になれるから。	若林区の避難所に勤務した50代の女性保健師
「あとは現場で判断してください」。その言葉の重みを感じた。	避難所勤務に従事した40代の事務職の男性
あなたは休んでください。私は、そのために派遣されたのだから。	宮城野区戸籍住民課に勤務した40代女性
2,000人以上がひしめく避難所。沢山の方々に支えられた保健活動。	避難所で保健活動を行った20代女性保健師
「任せよ」という上司の言葉にスイッチが入った。	震災廃棄物の処理を担当した40代女性
市民の命である水だけは、絶対守りたかった。	水道局に勤務していた30代男性技師
災害時は誰のために仕事をするのか、自問自答しながら業務にあたった。	支援物資を担当した40代男性職員
被災された方々にとって役所は、最後のセーフティネットだ。	宮城野区で区長を務めた50代女性

(1) 仙台市職員

1-1 新規採用職員研修【朗読・クロスロード】

仙台市職員研修所が主催する新規採用職員研修(325名対象)において、震災体験の伝承企画を実施した。仙台市職員の震災体験を朗読を通して参加者に疑似体験してもらい、さらにクロスロードにより参加者同士が当事者意識を持ちながら対応方法を考え合うことで、防災意識向上を図った。感想は(表4)のとおり。

表4 新規採用職員研修の感想

分類	割合	感想(計158)
職員意識・災害対応業務への理解	30.4%	職員としての対応への理解が深まった/職員としての自覚が強まった/現場・体験者の声が開けた/仕事のモチベーションが上がった(計48)
防災意識向上・日頃からの備え	7.6%	日頃からの備えの大切さを感じた/自分だったらどうするか考えさせられた/危機意識を持った(計12)
相互理解・コミュニケーション	2.5%	思いやりが大切だと感じた/コミュニケーションの重要性を感じた/自分以外の意見を聞いた/意見の違いに驚いた(計4)
伝承	21.5%	伝承の大切さを感じた/口伝の大切さを感じた/忘れてはならない/経験を伝えていきたい(計34)
想像・印象	20.3%	イメージがきた/リアルさを感じた/朗読が印象的/心に響いた/臨場感を感じた(計32)
その他	17.7%	業務経験がないと共感しづらい/朗読が演出しすぎていると感じた/震災を思いだし辛くなった/自身の震災体験を再確認した(計28)

1-2 震災体験継承講座【本人語り、対話】

仙台市防災環境都市・震災復興室の主催により、災害発生時に従事者が多い「避難所」と「罹災証明」をテーマとした研修会を開催した。主催者より全市職員に対し公募し参加者を募っているが、その約4割が東日本大震災時入庁前であり、各所属内で災害未経験者へ積極的に参加を促したことが影響ではないかと思われる。当日は東日本大震災で陣頭指揮を執った職員二人の話を聞いた後、震災経験者と未経験者とが一緒となるよう参加者をグループに分け、職員自身の体験共有のための対話の時間を設けた。Team Sendai は企画内容の提案を行った。感想は(表5)のとおり。

表5 震災体験継承講座の感想

分類	割合	感想(計65)
職員意識・災害対応業務への理解	66.2%	現場・経験者の話が聞けた/国や他自治体とのやりとりへの姿勢を学べた/上司自身が後ろ姿を見せることの重要性を感じた/職員の手や体のケアの重要性を感じた/罹災証明発行業務について知れたことがよかった(計43)
防災意識向上・日頃からの備え	4.6%	災害時活かされた震災前の取り組みを知ることができた/災害対応できる職員育成の重要性を感じた/心構えができた(計3)
相互理解・コミュニケーション	10.8%	当時現場では知ることのできなかつたトップの考えを知れてよかった/語り合うことの大切さを感じた(計7)
伝承	6.2%	震災時のことを思い出した/当時の体験の貴重さを感じた/本人の伝承が印象に残ったということを感じた(計4)
想像・印象	1.5%	体験談
その他	10.8%	普段の仕事の向き合い方の重要性を感じた/震災対応時の心残りがあったが講座中の言葉に救われた(計7)

1-3 青葉区防災研修【朗読、本人語り、対話】

仙台市危機管理室策定の「仙台市危機管理・防災研修訓練プログラム(平成30年度)」では、①職員の危機管理・防災意識の定着、②応援・受援業務を確実にこなせる職員の育成、③組織及び職員の危機・災害対応能力の向上を目標としている。危機管理室主催の防災研修・訓練のほか、各区でも防災研修・訓練の計画を策定し、実施・参加することとしている。この取り組みの一環として、青葉区では職員の災害時対応能力・防災知識の向上を目標とした研修を実施した。東日本大震災時に震災対応業務に従事した職員の体験談等を、朗読や講話、上記1-2と同様の目的でのグループワークを行った。Team Sendai として企画協力した。感想は(表6)のとおり。

表6 青葉区防災研修の感想

分類	割合	感想(計10)
職員意識・災害対応業務への理解	20%	現場・体験者の声が開けてよかった/職員としての自覚が強まった(計2)
防災意識向上・日頃からの備え	0%	—(計)
相互理解・コミュニケーション	10%	他職種と意識共有できる場となった(計1)
伝承	50%	震災時のことを思い出した/震災未経験者に参加してほしい/他区でも実施してほしい(計5)
想像・印象	0%	
その他	20%	当時若手だった職員の話を知りたい(計2)

(2) 他自治体職員

2-1 鶴岡市職員防災意識向上研修会【本人語り、朗読、映像、クロスロード等】

鶴岡市では「業務継続計画」を策定(2018年3月)し

表7 鶴岡市職員防災意識向上研修会の感想

分類	割合	感想(計56)
職員意識・災害対応業務への理解	50.0%	現場・体験者の声が開けた/判断時のリスクを考える重要性を感じた/公助のためにはまず自助を(計28)
防災意識向上・日頃からの備え	12.5%	想定外があることを学んだ/知らないことがあることがわかった/備えの重要性を感じた/防災意識の向上が必要だと感じた(計7)
相互理解・コミュニケーション	5.4%	人による考え方の違いがあると感じた/職場間の連携の重要性を感じた(計3)
伝承	8.9%	他職員も参加してほしい/本人の話は重要/自身の被災地応援経験を思い出した/多くの職員に伝えたい(計5)
想像・印象	7.1%	朗読に感動/想像力を刺激された/朗読でイメージがわいた(計4)
その他	16.1%	クロスロードが印象に残った良かった/活動の魅力を感じた/継続開催を希望/映画化を希望(計9)

たが、職員の災害に対する危機感が希薄であるという課題意識を受け、他自治体からの要請は初めてとなる出前講座を実施した。朗読や映像、クロスロードにより職員の防災意識向上を図り、業務継続計画をより実行性のあるものへ高めることを目的に、Team Sendai が企画内容の提案を行った。感想は（表 7）のとおり。

2-2 横浜市役所における朗読の取り組み【朗読】

Team Sendai と交流の深い横浜市職員有志の会「SONAE-BU（そなえぶ）～被災地の先輩に聴く」所属職員が、2018年2月より自身の職場や依頼先の職場の朝礼において、朗読の手法を用いて本市職員の体験を伝承する取り組みを行っている。感想は（表 8）のとおり。

表 8 横浜市役所における朗読の取り組みの感想

分類	割合	感想 (計 38)
職員意識・災害対応業務への理解	52.6%	職員の心や体のケアの重要性を感じた/職員としての自覚の重要性を感じた/職員としての使命感を感じた/被災地応援体制について考えさせられた/長期対応するために休むことの大切さを感じた (計 20)
防災意識向上・日頃からの備え	34.2%	想定外があることを学んだ/疑似体験で災害が起きるための備えとなる/現在の災害対応業務の課題を感じた (計 19)
相互理解・コミュニケーション	2.6%	協力することの大切さを感じた (計 1)
伝承	7.9%	自身の被災地応援の経験を思い出した/忘れてはならない (計 3)
想像・印象	2.6%	朗読により気持ちを寄せることができた (計 1)
その他	0%	—

(3) 防災に興味関心のある自治体職員・市民

3-1 あれから 8 年スペシャル【調査報告、朗読、映像、クロスロード、防災-衣☆食☆住、はじまりのごはん】

「あれから〇年スペシャル」は、震災から 5 年が経過した 2016 年 3 月に初めて開催した震災伝承イベントで、それ以降、毎年 3 月に開催している。なお朗読・映像・クロスロード（仙台市職員編）の伝承手法は、このイベントの開催を契機に開発したものである。当初より防災・現在に取り組む方々との協働による企画を実施。例年新たな伝承手法の開発を行っている。参加者は仙台市職員のみならず防災・減災活動や震災体験の伝承活動に関心のある他自治体職員・一般市民も含む。

2019 年 3 月に開催した「あれから 8 年スペシャル」では、2018 年度のエスノグラフィー調査の結果を基に内容を改新した調査報告・朗読・映像・クロスロードのほか、参加者同士の体験を語り合うワークショップ「はじまりのごはん」、防災に関する衣食住の知恵やノウハウを伝える「防災-衣☆食☆住」等を行った。新たな試みとして、同一の震災体験を調査報告・朗読・映像・クロスロードという異なる手法で多角的に伝承するある種のメディアミックスや、あれからスペシャルのテーマソングの制作・発表にも挑戦した。そして誰もが朗読の原稿に親しみ読み聞かせ等で活用できるよう「2-2 横浜市役所による取り組み」をきっかけに作成した冊子「人の口から人の心に伝える」⁽¹⁾を参加者へ配布した。感想は（表 9）のとおり。

表 9 あれから 8 年スペシャルの感想

分類	割合	感想 (計 49)
職員意識・災害対応業務への理解	18.4%	現場・体験者の声が聞けた/職員の葛藤を知ることができた/公文書に残らないけれども伝承しなければいけない話があることを学んだ (計 9)
防災意識向上・日頃からの備え	6.1%	自分だったらどうするか考えさせられた/身近なトイレの使い方がわかった (計 3)
相互理解・コミュニケーション	2.0%	職員の考え方が分かった (計 1)
伝承	18.4%	伝承の大切さを感じた/市民にも伝えたい/経験を話すべきになった/災害に備えている他都市へ伝えたい (計 9)
想像・印象	8.2%	感動した/美味しかった/心一つに歌えた/本人の表情、声で語られるパワーを感じた (計 4)
その他	46.9%	運営に対する提案/チーム力を感じた/楽しい企画であることが良い/朗読対話ワークショップをした (計 23)

(4) 一般参加者

4-1 せんだい 3.11 メモリアル交流館関連企画【朗読・映像・対話】

2019 年 1 月から約 6 ヶ月間、仙台市内にある震災メモリアル施設「せんだい 3.11 メモリアル交流館」（設置：仙台市、運営：（公財）仙台市民文化事業団）が、震災の記憶を後世へ伝えるとともに下水道の役割や重要性を広く知ってもらうことを目的とした企画展『3.11 現場の事実×心の真実「それでも、下水は止められない。」～東日本大震災・南蒲生浄化センターの知られざる闘い～』を開催した。

本企画展の展示調整に関わった南蒲生浄化センター職員は、震災後に入庁した Team Sendai のメンバーでもあり、活動に関わったことをきっかけに独自に東日本大震災を経験した先輩職員の体験談を聞き取り、朗読原稿等を作成していた。その経緯からメモリアル交流館より依頼を受け、会期中に関連企画として、初めて一般に参加者を公募しての伝承イベント『朗読「それでも、下水は止められない」～Team Sendai の取り組み～』を開催した。感想は（表 10）のとおり。

表 10 せんだい 3.11 メモリアル交流館関連企画の感想

分類	割合	感想 (計 82)
職員意識・災害対応業務への理解	15.9%	現場・体験者の声を聞けた/職員の使命感を感じた/職員の真実さを感じた/業者の使命感を感じた/現場では想定外の言葉は通用しないということを知った/仕事への責任感を感じた (計 13)
防災意識向上・日頃からの備え	1.2%	災害が災害でなくなる未来へ (計 1)
相互理解・コミュニケーション	7.3%	他部署の状況がわかった/相互理解が大事/たくさんの人に支えられているということ/他者のことを考えられる人間になりたい (計 6)
伝承	23.2%	口伝の大切さを感じた/発信していきたい/震災後入庁した職員自身の話/知らない体験を知ることができた (計 19)
想像・印象	23.2%	心に残った/リアルさを感じた/臨場感を感じた/(朗読で聞いた)市民のゴミ出しのマナーの悪さに悲しくなった (計 19)
その他	29.3%	継続を希望/貴重な機会/今だけでなく将来の最善を考える難しさに気付いた/失敗談も聞けた (計 24)

5. 伝承企画の成果・課題

本稿で取り上げた伝承企画一覧を（表 11）に示す。

5-1 全体的な傾向

仙台市職員・他自治体職員への講座では、全ての企画で「職員意識・災害対応業務への理解」に対する感想が多かった。しかしながらその背景は 5-2 で記述する通り、各企画の属性によって異なると考えられる。

5-2 属性ごとの傾向

「1-1 新規採用職員研修」については、「現場・体験者の声を聞いた/口伝の大切さ/貴重な機会」といった被災自治体職員として震災体験を聴くことに対する評価が得られた。また、「職員の使命感/仕事への責任感」など、市職員としての自覚の醸成や、「思いやりが大切/コミュニケーションの重要性」といった日頃から自治体職員として心がけるべきことについての気づきや学びが得られた。一方、入庁後間もない職員に対しての大規模会場での全体研修であったため、「業務経験がないと共感しづらい/朗読が演出しすぎていると感じた」など課題も挙げられている。業務経験を積んだタイミングでの研修実施の必要性や、グループワーク等で経験者との対話を含めるなど、新規採用職員の研修方法については工夫が必要だと考えられる。

「2-1 鶴岡市職員防災意識向上研修会」「2-2 横浜市役所における朗読の取り組み」については、いずれも「職員意識・災害対応業務への理解」カテゴリーの感想が全体の半数以上を占めた。地域は異なるものの同じ自

表 11 本稿で取り上げた伝承企画一覧

対象	(1)仙台市職員			(2)他自治体職員		(3)防災に興味関心のある職員・市民等	(4)一般参加者
企画名	1-1 新規採用職員研修	1-2 震災体験継承講座	1-3 青葉区防災研修	2-1 鶴岡市職員防災意識向上研修会	2-2 横浜市役所における朗読の取り組み	3-1 あれから8年スペシャル	4-1 せんだい3.11メモリアル交流館関連企画
実施日	2018.4.3	2018.11.30	2019.3.4	2018.11.16	2018.2~	2019.3.18	2019.3.9
開催時間	1時間	3時間15分	2時間	3時間	各10分	5時間30分	2時間
対象人数	325名	102名	40名	40名	160名(延べ人数)	90名	50名
実施の様子							
主催者	職員研修所	メモリアル事業担当	青葉区防災担当	鶴岡市防災担当	横浜市	Team Sendai	せんだい3.11メモリアル交流館
Team Sendai の役割	企画協力・実施	企画協力	企画協力	企画協力・実施	朗読原稿提供	主催	企画協力・実施
実施内容	朗読[区職員・保健師・下水], クロスロード	本人語り[元区長, 罹災証明], 対話	朗読[区職員, 物資輸送, 区長], 本人語り[保健師], 対話	活動紹介, 仙台市の被災状況, 朗読[保健師, 区職員], 映像[区長], 本人語り[震災廃棄物], クロスロード	各職場(資源環境局, こども青少年局, 経済局, 戸塚区)16課の朝礼において横浜市の有志職員が朗読	調査報告, 朗読[保健師, 物資輸送, 区長], 映像, クロスロード, 防災衣食住, はじまりのごはん	活動紹介, 朗読[下水×2, 区職員, 震災廃棄物, 保健師×2], 映像[震災廃棄物], 対話
感想 ※[]内は各カテゴリ毎の割合(%)	職員意識 [30.4] 防災意識 [7.6] 相互理解 [2.5] 伝承 [21.5] 想像・印象[20.3] その他 [17.7]	職員意識 [30] 防災意識 [7.6] 相互理解 [2.5] 伝承 [22] 想像・印象[20] その他 [18]	職員意識 [25] 防災意識 [0] 相互理解 [10] 伝承 [50] 想像・印象[0] その他 [20]	職員意識 [50] 防災意識 [12.5] 相互理解 [5.4] 伝承 [8.9] 想像・印象[7.1] その他 [16.1]	職員意識 [52.6] 防災意識 [34.2] 相互理解 [2.6] 伝承 [7.9] 想像・印象[2.6] その他 [0]	職員意識 [18.4] 防災意識 [6.1] 相互理解 [2.0] 伝承 [18.4] 想像・印象[8.2] その他 [46.9]	職員意識 [15.9] 防災意識 [1.2] 相互理解 [7.3] 伝承 [23.2] 想像・印象[23.2] その他 [29.3]

自治体職員同士であり災害対応者の生の声・リスクヘッジ・職員の心身のケア・他自治体との連携体制など、災害対応業務遂行に不可欠な知見への関心の高さが窺えた。

「3-1 あれから8年スペシャル」では、参加者から運営体制への感想や提案、伝承方法への具体的な提案、企画の楽しさについて触れた感想を得られたのが特徴的だった。これは参加者の多くが、自らの震災体験の伝承活動や防災・減災活動に取り組む伝え手側だったからだと考えられる。仙台市職員、それ以外の自治体職員、その他さまざまな立場の人々が、それぞれの手法で活動に取り組んでおり、その実践に基づく経験を踏まえての感想・提案を「あれから8年スペシャル」で寄せていた。

「楽しさ」は震災体験や防災・減災に関心の薄い人々の興味を惹く重要な要素であり、このことを実践を通して感じている参加者たちが感想の中で触れているのは、極めて自然なことと言える。そこでは主催者が一方的に情報を伝えるだけでなく、参加者から主催者への情報提供、参加者同士の情報共有など、双方向の関係が無教に生まれていたと言える。

「4-1 せんだい 3.11 メモリアル交流館関連企画」については、「想像・印象」「伝承」のカテゴリに属する感想を抱いた参加者の割合がそれぞれ 23.2%と最も多かった。これは自治体職員ではない一般の参加者がほとんどであった伝承企画だからだと考えられる。「想像・印象」のカテゴリの感想は体験談の印象の深さやリアリティ、臨場感といった参加者の心のありようそれ自体に関わるものなので、一般市民対象の伝承企画でも数多く見ることができたのではないだろうか。また「伝承」のカテゴリに属する感想が多かったのは、体験を後世に伝えたいという願う思いや理由を市職員から語り対話する伝承手法としての特性によるものだと考えられる。15.9%と次いで多かった「職員意識・災害対応業務への理解」カテゴリの感想は、自治体職員がその回答をした場合、職員としてのモチベーションアップや倫理観向上のあらわれとして解釈できる。しかしながら市民対象の伝承企画においては、自治体職員への信頼・行政への理解の高まりのあらわれである可能性が高い。体験談のなかの職員の行動や、非体験者が伝承に取り組む活動の姿勢など

により、責任感や使命感を本取り組みから感じたと考えられる。市職員自らが自分達の体験を市民を主な対象として伝承する企画であったため、手前味噌として受け止められ反感が出ることも想定していたが、実際には全くなかった。これは受け手が体験者の気持ちを想像・共感し、自ら教訓や学びを得られる伝承手法としての朗読・映像の特性によるものだと考えられる。エスノグラフィー調査の手法で収集された、体験者本人の言葉に正確・忠実な淡々とした伝承スタイルが、受け手に想像力を働かせる余白をつくり、共感を生んだのではないだろうか。

6. まとめ

本稿では、仙台市および他自治体職員への研修、一般向けの伝承企画の企画の広がり、企画ごとの特徴や感想を一覧化することにより、属性や手法ごとの傾向・課題を明らかにした。

今後は本結果を受け、企画段階より更に効果的な企画展開と研修プログラム開発につなげていく必要がある。

参考文献

- 1) 柳谷 理紗, 鈴木 由美, 佐藤 翔輔, 田中 聡, 重川 希志依: 「Team Sendai (チームセンダイ)」による被災自治体職員の災害対応の継承に関する研究, 地域安全学会梗概集 No.43, 2018. 11

補注

- (1) 「人の口から人の心に伝える～声で伝える仙台市職員の震災体験朗読原稿集」は、以下 URL よりダウンロード可。

<https://tumblr.co/ZfimmW2iF1UAA>

謝辞

本研究の一部は、平成 29 年度東北大学災害科学国際研究所リソースを活用した共同研究「東日本大震災および熊本地震における仙台市の災害対応に関するエスノグラフィー・アーカイブスの構築(研究代表者: 常葉大学 田中聡)」, 平成 30 年度東北大学災害科学国際研究所リソースを活用した共同研究「東日本大震災における災害対応に関する災害アーカイブスの社会実装方法に関する研究(研究代表者: 常葉大学 田中聡)」によるものである。ここに記して感謝の意を表します。